# 俳句集　瞬間

小林　道憲

# 句集　瞬間

小林　道憲

# 早春

もの言わぬこけしの微笑や　春立ちぬ

麦の青　ぬくむ土くれ　春の雪

たおやめの素足　たたみに　春浅し

歯の抜けし吾娘の笑いや　雛祭り

雛祭り　花をかざしし吾娘の見栄

雛祭り過ぎても寒き小雨（しょうう）かな

芽を吹きて　春を促す柳かな

城を巡る　柳千本　江戸の朝

春雨や　水面（みなも）に浮かぶ魚（さかな）たち

浮き草のかすかに動き　魚（うお）行きぬ

葦の影　さざ波に揺れ　魚(うお)群れる

鴻(おおとり)の残しし泥の足の跡

水ぬるみ蠢(うごめ)き出しぬ　田螺(たにし)かな

読みかけの本めくりたり　春の風

突風に　旗ひるがえる日や　卒業す

# 陽春

水ぬるみ　花の大和は百余国

雨けむり　南都は四百八十寺

地ゆるみ　雨促して　万花咲く

もの言わぬすみれの花の隠れ里

老い椿のもとに生まれて　月赤し

句を得るも　たちまち忘る春の宵

鳥啼けど　起きたきもなき春の朝

春雨や　書ける草書も斜めなり

翅(はね)赤き胡蝶を逃しし蜘蛛(くも)の夢

頬(ほお)ささえ　春禽(しゅんきん)を聞く乙女かな

頬(ほお)濡らす雨に　乙女の髪乱る

花を見て日暮れを愁う　乙女かな

十年(とせ)の隔たり埋める娘(こ)の微笑

懐かしき人会えずして　花筐(はながたみ)

梨花一枝　雨帯びてなお　涙かな

桜雨　ほのかに消ゆる　傘二つ

人の世の恋に恥あり　紅つばき

別れのみ多き人の世　春の雨

## 晩　春

花散って　涙に濡れし　初化粧

落花空し　恨みはなおも残れるを

人亡くて　名残の花のありどころ

山あいの里に雨過ぎ　百花尽く

春の田に鳴いてまたやむ　蛙かな

ササゴイのひとり魚児捕る岸辺かな

春泥を啄ばんで飛ぶ燕かな

花雨（かう）けぶり　土黒くして　アザミ咲く

過ぎてゆく春の行方や　藤の花

## 初　夏

列島は　みな若葉なり　稚魚孵（かえ）る

水底に身を翻す魚（さかな）かな

水満ちて　映る山影に　苗植える

新緑や　生え初(そ)む孫の歯の白さ

歩み初(そ)めし児(こ)の雄叫びや　青葉かな

八百万(はつぴやくまん)の花の顔見世　青舞台

三方に青山連なる京の寺

藤蔓(ふじづる)の曲がりて　蛇のごときもの

青稲をすれすれに飛ぶ燕かな

そのころの人懐かしき　桐の花

あの雲は夏の雲なり　早苗取る

不如帰（ほととぎす）　聞く人もなき山路かな

梅　雨

ふるさとに識る人もなし　夏つばき

無残なる時の刻みや　落ちつばき

おおばこをかざして踊れ　蛙（かわず）ども

大海を知れる蛙の労苦かな

忌わしき　あれは六月四日のこと

紫陽花の葉に　蝸牛　字を書けり

雨だれや　なすこともなく頭掻く

気がつけば　紅さす梅の熟れるころ

雷雨止み　八百八町　梅雨明ける

## 盛　夏

碧空に匂える麦の香りかな

宵山の宵に乱れて恋ごころ

仰ぎ見るうちわの数や　夏芝居

町屋根を　夕立急ぐ　江戸の暮

雨過ぎて　蝉鳴きしきる南禅寺

風止んで　木陰恋しき夏日かな

朝顔や　今朝の女の薄化粧

朝明けて微雨あり　合歓（ねむ）の花開く

起きるなり　不愉快なことあり　合歓の花

夢はさて　いづくにゆきし　蓮の朝

珈琲の湯気のゆらぎや　夏の朝

百日紅の花を青磁の瓶に挿す

盤上を竹影動く碁打ちかな

寝太郎の住処(すみか)はぼうぼう　草の家

蚊遣り火の煙(けむ)の行方や　天の川

海の青　孤(ひと)りかもめや　空の青

絶海の孤島の森や　蝉しぐれ

寒蝉(ひぐらし)の朽木を抱きて　死につけり

万丈の山の頂き　古城あり

変らぬは　ただ瀬音のみ　古城かな

## 秋

風鈴の短冊よれて　秋立ちぬ

瓢箪の一つ残りて　秋は来ぬ

かたばみの実はじけいで　秋立ちぬ

大陸へ黒雲急ぐ野分かな

桐の実を鳴らす風雨（ふうう）の頃となる

雨露に　岸辺の蒲の濡れるころ

茎赤き蕎麦の花咲き　日落ちぬ

雪にまごう月光のもと　蕎麦の花

木犀の花より白き匂いかな

竹群（たけむら）にみ墓を訪う女（ひと）ひとり

秋の野に立つや　羅漢のすまし顔

泣き濡れて　萩に恋する狐かな

笛の音（ね）の遠きに消ゆる忌み日かな

いとせめて　秋の夜に打て　その鼓

日暮れて　夕陽に戯る乙女たち

落日の　紅（くれない）の中に舟ありき

霧中（むちゅう）より姿を見せる舟帆かな

立ち昇る煙（けむ）の直ぐさや　暮の村

山静か　百舌鳥の囀（さえず）りしきりなり

荒城に　夕日斜めに差し出でぬ

淵清く　水の浅きを疑いぬ

雨去って　銀河きらめく　夜半の秋

## 月

はらはらと月落つ夢を見る夜かな

紫の影移ろいぬ　不具の月

月一つ青天にあり　秋あかね

月天心　暗がりの鳥　啼き出しぬ

霧深く　月下に舞うや　裸女の影

黄泉（よみ）の国の月の祭りの鬼の舞

木犀の香りに滲みる月明り

鳴き渡る孤雁の鋭声　月ひとつ

幼くて　みまかりし児や　秋の月

晩　秋

狂猿の鋭声ひとつ　湖（うみ）に落つ

飛ぶ鳥を　雲相（あ）い逐（お）う　夕日かな

海渡る鳥の姿や　列島弧

子らの影　夕日に長く　野を帰る

ひとつ家(や)に団欒ありて　灯(ひ)つきぬ

峰々は　斜陽に立ちて言語(ことば)なし

露うけて　朝日に光る蜘蛛の糸

サルビアの朱つれなくて　秋暮れぬ

雲を分け　鳥のぼりたり　老いの秋

野晒しの髑髏に吹くや　秋の風

立ち尽くす　暮れ行く川に　僧ひとり

梢より　熟れ柿ひとつ落ちにけり

柿落ちて　また静かなり　里の京

能「野宮」

野の宮に残る恨みや　花車

秋深し　山　人なくて　松子（しょうし）落つ

そよと吹く風に狂いて舞う落葉

鬼灯（ほおずき）をさげて弔う小鬼かな

二番穂も枯れて鷺たつ　月夜かな

修善寺物語

残り灯にたゆとう面の死相かな

老残の身にしむ芭蕉の雨の音

潮引いて　漁船ななめに置かれたり

枇杷の実の枝をしならせ　山雨降る

麦の芽を時雨過ぎゆく　地の匂い

時雨降って　労咳（ろうがい）に啼く鴉（からす）かな

ぎんなんの翡翠を凌ぐ緑かな

霜落ちて　熊　樹（き）に登る山路かな

野良犬のたむろして啼く霜の朝

# 冬

冬立ちて　実りし柚子（ゆず）に　霜帯びぬ

竹藪にすずめ多くて　初あられ

赤き実の青木になりて　初あられ

木枯らしや　柿のこずえに破れ凧

木枯らしに落ち葉舞うころ　別れたり

木枯らしや　げに治まらぬ四方（よも）の国

寒空のもとに古人の石碑あり

世間との交わり辞して　里の暮れ

塔一つ　池の水面（みなも）に揺れる暮れ

暮れ近し　枝を争う雀たち

顔見世や　晴着の君の初化粧

冬天に峰たしかなり　富士山系

大君(おおきみ)の国治まりて　陽(ひ)昇る

岩走る水凍(い)てつきて　音もなし

風流は寒きものなり　人を待つ

ふるさとは　またふるさとの寒さかな

列島に蒲団着せたき夜寒かな

ひとり寝の夢ばかり見る夜寒かな

幕落とす舞台のごとき雪景色

吹き抜けに雪舞い散るや　鹿苑寺

雪深し　藁(わら)打つ音のみ聞こえけり

雪積む夜　爪切る音のみ響きたり

冬の夜や　目覚めて　雨かとひとり言

歳(とし)去ってまた歳来り　水仙花

首かしぐ　はかなき媚や　水仙花

憂う世に未練はありぬ　水仙花

亡き人の面影みゆる水仙花

いつ死ぬるやと思いつつ　豆を食う

立春という名だけでも聞きたき日

湯湧いて　茶立てぬ　梅の宵

枯梅（かれうめ）は雪を花とし　空青し

麦の芽が　雪間を分けて生（お）い出（い）でぬ

## 無　季

波に乱る水面（みずも）の影や　鬼女の舞

夢に顕（た）つ憎き女の艶姿

空と水　分かれて　列島現われぬ

尽くさざることありてまた　封開く

さかさまに衣服着込みて　急ぎたり

垣高く　見え隠れする帽子かな

夢覚めて　いずこにいるやを疑いぬ

## 異　国

モンゴルの荒野を急ぐ数千騎

ひとすじの煙立ちたり　ゴビ砂漠

千年の恨みを呑みし黄河かな

長(とこし)えに清(す)むことのなき黄河かな

昭君の黛青し　胡国かな

長安に舞踊る胡姫(こひ)の微笑かな

長江に銀河映りて　舟下る

長江を　柳芽渡り　春来たる

舟影の碧空(へきくう)に尽く揚子江

峨眉の山　水に映りて　人を追う

虎の子も涙する夜や　峨眉の月

夕月を恨みに思う　貴妃の眉

マリア像に寄せて

泰西の村はずれにも祠(ほこら)あり

## 時代

国憂う我を貶む輩(やから)あり

憤(いきどお)りなお消えやらず　小夜嵐

また何ぞ故国(くに)を懐(おも)わむ　小夜嵐

僻遠の地にあり　風のよどみかな

世と我は相違いたり　花茨

混濁の世と相絶ちて　古書開く

濁世(じょくせ)なり　夜を徹して杜鵑(とけん)啼く

梅雨寒(つゆざむ)や　眉間(みけん)に寄せる憂いかな

衝天の覇気も失せたり　合歓(ねむ)の花

故郷また茨のごとし　日落ちぬ

日落ちて　思うことあり　祖国かな

慷慨して寝ね難き夜　急雨聞く

人間(じんかん)に行路の難あり　蔦かずら

木枯らしや　追えども去らぬ瞋恚(しんに)かな

野(や)に埋もれ　思い定めぬ　霰(あられ)かな

巴歌(はか)満ちて　我に余れり　道の暮

時利せず　何をか陳(の)べむ　夜寒かな

## 人　生

少(わか)きより俗に適さず　山の百合

胸深く潤す涙　何故に

今、昔、流るる水の如きもの

迷い来て　憂き世の旅の雨宿り

三界に住む所なし　棘（いばら）かな

誤りて　塵網に落つ　四十年

夢の世に夢見たりけり　五十年

盆中の虫にも似たり　七十年

七十年　六十九年を悔い入りぬ

疑いは人間(じんかん)にあり　空の青

埋もれ木や　人知れぬ身の置きどころ

一生作(な)すに慵懶(ものう)く　甎磨(せん)く

生涯　何に似たりるぞ　一飛蓬

## 宇宙生命

十悪の世に香（かんば）しき梨の花

花開き　道歩む人　春に遭（あ）う

煩悩を断ずることなく　花を見る

小夜嵐　仏迷って　衆生あり

立つ煙（けむ）や　迷いなくして悟りなし

十字切るドクダミの花に　罪託す

もじずりの螺旋の先の銀河かな

露に泣く庭の千草に光さす

昔日は大海なりき　富士山頂

あとずさるゾウリムシにも　心あり

飛ぶ鳥の中に染み入る空の青

鳥去って　孤雲消えたり　空の青

大空の尽くるところに　鳥没す

雪中に燃ゆる一輪の紅椿

一輪の梅華の中に　春開く

自由律

春の海や　たつのおとしご　のらりくらり

この佳き日　さやかなる声聞ゆ

窓を開ける　蚊が来る　香を焚く

ふと見上げる　碧空に　雲ひとつ

湯帰りの　咳一つ二つ　角を曲がる

## 補　遺

夢ひとつ見ずに覚めたる夏の朝

明けやらぬ東の空や　戻り梅雨

われ死ぬる時の思いや　仏桑華

眠れぬ夜　憤（いきどお）りあり　不具の月

忘れずに　そのころに咲きし　彼岸花

輝ける垂（たる）氷の先の滴（しずく）かな

春過ぎて　はやくも終わりし花の宴

春の田に　第九を唄う蛙ども

人知れず　岩間に咲きし菫草

もの言わぬ花にも　こころありぬべし

村人の墓に刻まれし名を追いぬ